文芸

短編

息子（5）

十市梨夫

「いつか村の青年団の会合でそのことについて語り合ったが、村の娘さん達の言い分としては、必ずしも泥をつける生活がいやという訳ではないらしいんだ。いちばんの難点は農家の家庭様式にあるようだれ、親達や年寄りまでいる複雑な家庭の中では結婚しても自分達の意思で生活の設計をすることは有るされないし、早速親達に従属して働かなければならない。周りから強要されたきりのない労働時間の中では、新婚のよろこびも何もあったものではないからね。そんな計画性のない農家の生活には希望がもてないというのだ。サラリーマンなら十年すれば必ずサラリーは倍か三倍になるが、農家ではいくら汗水流して働いても下手をすると十年も同じ状態がつづく場合さえあるし更に妹達の婚資から弟達の学資、それに年寄り達の面倒と、その苦しい家計の中からやり繰りしなければならなくなると一生うだつはあがらないからね、だからいまの農村では次男坊よりも跡取り息子達がいちばん哀れな存在になっている。かれらはじっとそのことに耐えてきたが、そのために好きな人ともいっしょになれないとするとやがてかれらの気持にも限界がくるだろう」

「あなたには現にいい職場があるのにどうしてそんな境遇へ還ってゆこうとなさるの？」

「ぼくにはそうしなければならない立場があるだけで、家庭的な悪条件は何もないからだ」

道子は引緊った男の口許を眺めた。そして全くこの人の家庭には障害になるものはないと思った。そして別のことが泛んできた。それは昨年夫を喪ったために職業婦人になって苦労している姉の身の上についてであった。サラリーマンの生活は唯一の働き手をなくしたら、それっきり収入の途は絶えるが、農家では土地がある限りそうした面での安定性はあるように思われる。その姉の一家の面倒まで時々兄の上にかかってくるのだから、どこに住んでいたって一家の主人公ともなればそれぞれに苦労はあると道子は思った。

「お年寄りのことなんかは家族制度のある限り、都会に住んでいたって同じじゃないかしら」

「ところが都会と田舎ではすこしちがうんだ。都会の俸給生活なら単に年寄りを扶養するだけでことが足るが、農家では年寄り達がなかなか頑固で口やかましいからね、躰は動けなくなっても、いちいち仕事のことに干渉する。例えば一反歩の稲の品種を選ぶにしても、年寄りの指示通りにしなければならないとする。これでは若い者はいつまでもやり切れないだろう。財布だって子供が中学に通う年頃になっても、まだ渡して貰えない者だっている」

「分かったわ」と道子は言ったが、それで気持のふんぎりがついた訳ではない。母は多分正面から反対するだろうと道子は思う。道子自身も農家へ嫁ぐために大学へまで通った訳ではない。だがこの青年と話している間に、深い一つのおもいが、だんだんと身内に燃え拡がってくるのを、どうすることもできない。

「兄は農家の生活に